

Kagoshima University International Center for Island Studies

島嶼研だより

No.87

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

2024年3月

主な記事

あれから9年（高宮広土）	p1
学生奮闘記「『調査』を通して学んだもの」（二町侑樹）	p3
フィールドこぼれ話「自然の恵み」（川西基博）	p11
連載 世界島めぐり 第十回 「三宅島 日本」（牧 貴大）	p12

あれから9年

国際島嶼教育研究センター
高宮広土

2014年12月4日は運命の日だった。その日13時より島嶼研教授採用の面接があり、自分自身の研究内容を発表し、質疑応答などがあった。結果は運良く(?)採用された。翌年3月28日の午後、鹿児島島の地に足を踏み入れた。これから新しい生活が始まる。甲突川河畔では桜が満開で、桜島は噴煙を上げていた。これから9年間、この地で暮らすことになる。全く新しい環境で、知人もすくなく、さらに島嶼研のメンバーはだれも知らない。長い、長い9年間になるという予感がした。4月1日に大学へ初めて顔を出し、島嶼研のメンバーや学長などに挨拶をする。鹿児島大学での生活が始まった。

と、いっても採用条件のメインはその年4月に開設された奄美分室を担当し、そのため半年以上奄美で生活するというものだった。その「半年以上」は9ヶ月の奄美生活となり、残りの3ヶ月が郡元での生活となった。このポジションに応募した理由は奄美・沖縄諸島の先史時

代には世界的にみてとても稀な文化現象があることがわかりつつあり、そのことを地元の方々に還元できる機会が、その前に住んでいた札幌より増えるのではないかと思われたからである。また、奄美市（より正確には笠利町）には地元で著名な考古学者の中山清美さんもおられた。彼となら100歩から奄美への貢献を始めることができるかと確信していたこともここへ来た理由であった。が、大変残念なことに彼は翌年急逝された。奄美への貢献は100歩どころか、2歩からのスタートであった。奄美でのスタートがゼロからではなく、2歩からできたのは、中山さんが奄美のいろいろな方を紹介してくださったからだった。この9年間で4歩まで前進できたのであろうか。

奄美では2歩からのスタートで、よくて4歩まで前進したかもしれない。では、郡元ではどうだろう。こちらはゼロからのスタートだった。右も左もわからなかった。年3ヶ月の生活では

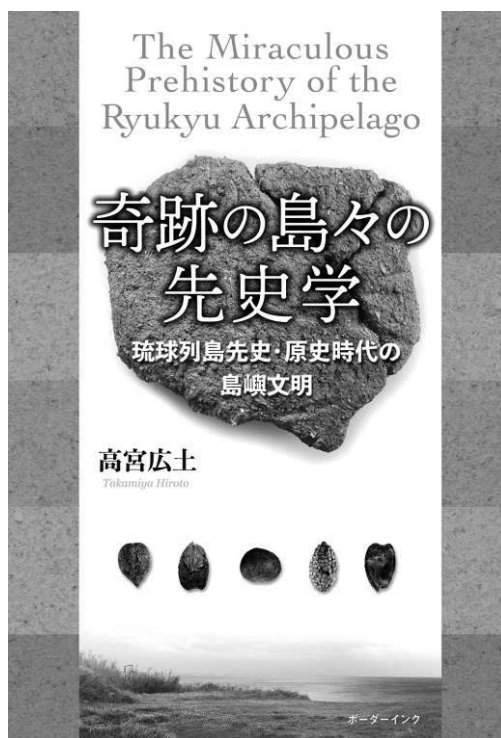
(2) 島嶼研だより No.87

郡元を知るには短過ぎた。幸いなことに島嶼研のメンバー（専任、特任、客員、事務補佐、研協の方々等）が素晴らしい面々だった。また、島嶼研を通して知り合った研究者等もみなサポート的な人たちばかりだった。お陰で郡元での年3ヶ月の生活も無難に過ごすことができた。が、想定外だったのが最後の2年間の島嶼研センター長。最初の7年間は9ヶ月奄美生活（コロナの頃は1年以上）で、郡元の事情はほとんど理解できていなかった。ほぼ絶望的なセンター長の引き継ぎだった。が、（多分）大きな失敗はしなかったと思う（2024年1月4日時点で）。これも島嶼研のメンバーと兼務教員などの島嶼研関係の研究者のお陰である。このような人たちに巡り会えて本当に良かったと痛感している。この場をお借りして上記の方々に心よりお礼を述べさせていただきたいと思う。「皆様のご協力・ご支援に心より感謝申し上げます」。

島嶼研に来たときの大きな目標は「島嶼研の人たちの足を引っ張らない」ことだった。引っ張らずにすみませんでしたでしょうか。この9年間は、今振り返ると、あっという間だった。関係者の皆様、ありがとうございます。心より感謝申し上げます。皆様の今後のご活躍を心よりお祈り申し上げます。



島嶼研の専任教員と釜山での学会で（左から河合・大塚・高宮・山本 2019年11月29日）



2021年に出版された書籍



西之表市小浜貝塚発掘調査終了後
(2023年5月6日)

学生奮闘記

「調査」を通して学んだもの

二町 侑樹

(鹿児島大学大学院理工学研究科理学専攻 生物学プログラム修士1年)

昨年の5月私は人生で初めて屋久島を訪れました。目的は、屋久島での森林調査のためです。森林では調査プロットを作り、樹木の直径を測定する毎木調査を行いました。屋久島には2019年まで鹿児島大学で教鞭をとられていた相場慎一郎先生(現・北海道大学)の調査プロットが複数あり、20年以上調査が行われている歴史ある調査となっています。今回の調査は北海道大学の方々との10日間にわたる合同調査でした。

私自身研究室に配属されてから約2年が経ち、県内外さまざまなフィールドを歩いてきました。その中でも、屋久島で印象的だったのは、巨樹が多かったことです。樹木は、長い年月をかけて成長していくため、巨樹が多いというのは、昔から人の手が加えられていないとても珍しいことだと考えています。屋久島では縄文杉も有名ですが、調査プロット内でも県本土で、今まで見たこと無いような直径2m近いスギやツガの巨木をみることができました。このような樹木を測定できるのは、古くから生態系が守られていると実感することができ、とても貴重な経験でした。また、ヤクジカやヤクザルはもちろん低地～標高の高い場所まで様々な森林の植生を観察することができ、屋久島独特の生態系を肌で感じることができました。



写真1 大木の直径の計測の様子



写真2 調査地での集合写真

「鹿児島大学奄美群島拠点内覧会・シンポジウム 2023 -国際島嶼教育研究センター奄美分室改修記念-」

国際島嶼教育研究センター奄美分室は2015年4月に旧名瀬市保健所跡に開設され、その後2019年4月に現在の奄美群島大島紬会館6階に移転しました。奄美分室開設以来今日まで、奄美分室では、奄美群島、アジアおよび太平洋

の島々を多角的に研究し、その成果を島の方々にお伝えする努力を行ってきました。

このような奄美分室の機能をさらに拡充のために、今年奄美分室横のスペースの改修工事を行い、7月には名瀬公民館金久分館にあった

(4) 島嶼研だより No. 87

奄美サテライト教室と奄美島嶼実験室を改修後のスペースに移転し、新たにセミナールームと多目的ルームが誕生しました。セミナールームは勉強会やシンポジウムあるいは研究者と地元の方々との交流の場として、多目的ルームは簡単な実験や分析ができる場として、今後活用される予定です。

この度奄美分室改修工事竣工を記念して、セミナールームや多目的ルームの内覧会およびシンポジウムを開催するものです。

鹿児島大学奄美群島拠点
内覧会・シンポジウム2023
— 国際島嶼教育研究センター奄美分室改修記念 —

12.30-13.20 島嶼研奄美分室内覧会
13.30-17.00 講演会
総合講師 岩井 久 (鹿児島大学理事)

日時：2023年12月16日 (土)
場所：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室
(奄美市名瀬海町15-1 奄美群島大島総合館6階)
※ 奄美市名瀬海町15-1 奄美群島大島総合館6階

司会 安田壮平 (奄美市長・奄美群島広域事務組合管理者)
新川康枝 (鹿児島県大島支庁長)

奄美群島の魅力的な食肉資源
大塚 彰 (鹿児島大学農学部)

沖永良部島の持続的発展に向けた教育・研究プロジェクト
澤田成章 (鹿児島大学法文学部)

奄美における生物多様性保全とモニタリング
奥山正樹 (鹿児島大学南九州・南西諸島域イノベーションセンター)

奄美～優れた医学教育フィールド
大脇哲洋 (鹿児島大学医学部)

自然と調和した島？先史時代の奄美・沖縄諸島
高宮広土 (鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

総合講師 井戸章雄 (鹿児島大学理事)

オンライン参加可能
要事前登録
参加無料
※ 参加登録の詳細はこちら
12月14日(木)締切

▼ 問い合わせ・参加登録 ▼
鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室
奄美市名瀬海町15-1 奄美群島大島総合館6階
E-mail: amami@icji.kagoshima-u.ac.jp
Tel: 0991-49-4822

シンポジウムのポスター



【プログラム】

講演会

開会挨拶

岩井 久 (鹿児島大学理事)

祝辞

安田壮平 (奄美市長・奄美群島広域事務組合管理者)

新川康枝 (鹿児島県大島支庁長)

講演

1) 奄美群島の魅力的な食肉資源

大塚 彰 (鹿児島大学農学部)

2) 沖永良部島の持続的発展に向けた教育・研究プロジェクト

澤田成章 (鹿児島大学法文学部)

3) 奄美における生物多様性保全とモニタリング

奥山正樹 (鹿児島大学南九州・南西諸島域イノベーションセンター)

4) 奄美～優れた医学教育フィールド

大脇哲洋 (鹿児島大学医学部)

5) 自然と調和した島？先史時代の奄美・沖縄諸島

高宮広土 (鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

閉会挨拶

井戸章雄 (鹿児島大学理事)



新しく整備されたセミナールームで開催されたシンポジウムの様子(左と上の写真)

島嶼研シンポジウム

「地域課題からの『創造』—与論島で暮らしと未来を考える—」

与論町をはじめとする島嶼部においては、地域のつながりが色濃く残る一方、核家族・少子高齢化の進行に伴い、既存のシステムが機能しなくなりつつある部分もみられています。特に人口減少の波は、与論町においても社会経済の担い手の減少を招き、それを背景に高齢者の孤立や、空き家の増加などさまざまな課題が顕在化しています。地域社会の存続への危機感が生まれる中、社会保障や産業などの領域を超えてつながり、地域社会全体を支える地域共生社会の実現が、これまでも増して重要となっています。

そこで、「地域づくりは小さなところから／わたしから始める／出会いを楽しむ」をコンセプトに、島嶼部における実践事例として、地域住民でもある役場職員有志がきっかけとなり課題に取り組み、その成果の一部や見えてきた構想・展望等を報告します。本企画ならびにシンポジウムを通して、地域の課題やテーマを共有することで、さらに立場や役割を超えて協働しながら創造的に取り組んでいくための土台づくりの機会にしたいと考えています。

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター・科研費シンポジウム

地域課題からの「創造」

与論島で暮らしと未来を考える

2024年 2/10 土

島から 島をおもしろく！

13:30 開会・趣旨説明 (13:00 受付開始)

地域づくりは「わたし」から
森隆子 (鹿児島大学・与論町役場)

14:00 第一部

1) 古いと障がいへのまなざしー地域の出会いから
池田ひとみ (与論町役場)

2) 島ではぐくむ地域のまなざし
稲留直子 (鹿児島国際大学)

3) 経験を通して見えてきたことーわたしの新人奮闘記
稲江翔馬 (与論町役場)

4) 居住支援について、考える』
日高彩那 (与論町役場)

14:30 第二部

1) 「楽しい」「面白い」をいつまでも
裾分理司 (与論町役場)

2) 防災ゲームからみえてくる地域とのかかわり方
出村雅代 (勝手に!!ゆんぬぼ〜えい隊)

3) もしも!の災害からみる地域
野口貴子 (勝手に!!ゆんぬぼ〜えい隊)

15:00 第三部

1) ヨソのワカモノがシマで暮らししてみた
浅尾晋也 (宇検村役場)

15:50 全体討論・対話
波多野浩道 (鹿児島大学名誉教授)

16:30 閉会挨拶

会場 与論町地域福祉センター (大島郡与論町家花2643-3)

参加料 要事前登録
オンライン開催あり
聴講料無料(聴講センター
電費分定でも申請します)

問い合わせ・申込み
参加登録はこちら
2/9 (水) まで
https://or.pms.jp/48507

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
国際島嶼教育センター
〒999-7394
鹿児島県与論町家花2643-3
TEL: 099-739-7394
E: shimaken@ci.kagoshima-u.ac.jp

与論町の窓口 | 与論町健康推進課
(与論町地域福祉センター)

TEL: 0997-57-3112 (直) (通)

企画費 写真とコトバの、小さな展示会

科研費 10K1107: 地域課題の管理実践ならびに知能を促す学習プログラム教材の開発: の助成を受けて実施します。
主催: 鹿児島大学国際島嶼教育研究センター 共催: 与論町 後援: まなび島

開会・趣旨説明

地域づくりは「わたし」から
森隆子 (鹿児島大学・与論町役場)
平敷結美 (与論町役場)

第一部

- 1) 古いと障がいへのまなざしー地域の出会いから
池田ひとみ (与論町役場)
- 2) 島ではぐくむ地域のまなざし
稲留直子 (鹿児島国際大学)
- 3) 経験を通して見えてきたことーわたしの新人奮闘記
稲江翔馬 (与論町役場)
- 4) 居住支援について、考える』
日高彩那 (与論町役場)

第二部

- 1) 「楽しい」「面白い」をいつまでも
裾分理司 (与論町役場)
- 2) 防災ゲームからみえてくる地域とのかかわり方
出村雅代 (勝手に!!ゆんぬぼ〜えい隊)
- 3) もしも!の災害からみる地域
野口貴子 (勝手に!!ゆんぬぼ〜えい隊)

第三部

- 1) ヨソのワカモノがシマで暮らししてみた
浅尾晋也 (宇検村役場)

全体討論・対話

コメンテーター
波多野浩道 (鹿児島大学名誉教授)

国際島嶼教育研究センター研究発表要旨

第 233 回 2023 年 10 月 16 日

島ミカンを救えー喜界島におけるゴマダラカ
ミキリ撲滅大作戦ー
津田勝男
(鹿児島大学名誉教授)

喜界島には在来カンキツとして喜界島特産のケラジミカン *Citrus keraji* やキカイミカン、クネンボ *Citrus nobilis*、などの“島ミカン”が植栽されています。これらの他にも未だに特性が解明されていない“島ミカン”もあるものと考えられます。

ところが、喜界島では 2008 年頃からゴマダラカミキリによる被害が目立ち始め、毎年一割ずつミカンの木が枯れるという事態に直面しました。ゴマダラカミキリの被害を放置すれば、これらの“島ミカン”が人知れず消えていくことも懸念されました。

そこで、喜界町と鹿児島大学農学部害虫学研究室との共同研究で 2012 年から天敵糸状菌製剤による防除試験を開始し、さらに、2015 年からは島全体に及ぶ超広域施用まで規模を拡大しました。今回はその経過と成功に至った要因を解説します。

また、南西諸島で問題となっているゴマダラカミキリ種群間の交雑の実態を解明するために幼虫から飼育した個体を交配することによって得られた知見も紹介します。



津田勝男氏

第 234 回 2023 年 11 月 6 日

軽石漂着という社会問題を自然科学の視点で
教材化した取り組み
丸谷 由
(一般社団法人ネコのわくわく自然教室)

この発表では、軽石の大量漂着という社会問題化した自然現象について、自然科学及び環境教育の視点で学ぶ教材と講座を、民間の教育団体と地球科学の専門家が連携し、短期間の内にアウトリーチ活動につなげた事例を紹介し

ます。
2021 年 10 月に琉球列島を中心とした地域で起きた軽石の大量漂着（福岡ノ場 2021 噴火による）は、多くの人の記憶に残る地学イベントとなりました。遠く離れた海底火山からもたらされた軽石は、わずか数日で沿岸の風景を変え、海上交通や漁業、観光業に大きな影響をもたらし、深刻な社会問題となったのは記憶に新しいところです。

このような軽石漂着は、ひとつの地域では数十年に一度という希な現象であり、国内においても近代化以降初めて観測された規模のものでした。そのため災害としての側面がある一方、地学的な自然の営みを直接観測できる貴重な機会でもありました。

子ども向けの自然学習教室を展開する当団体では、一般にはあまり知られていなかった「軽石漂着」という現象について自然科学の視点と、環境教育の視点から学びにつなげる事を目的に、漂着直後から教材作りと講座開催に取り組みました。地学分野の専門家と連携して漂着後 1 ヶ月で書籍の発行、軽石を題材にした 10 種類を越える教材の開発、地域の学校や自治体と連携したプロジェクト実施など、漂着後 1 年半で 80 回を超える教育事業を開催したプロセスを紹介します。



丸谷 由氏

第 235 回 2023 年 12 月 18 日

日本列島におけるコウモリの多様性とその保
全に関する研究

牧 貴大

(鹿児島大学島嶼研奄美分室)

島嶼地域において、大陸や島間での接続の歴史は、現在の島の生物相に大きく影響を与えることが知られている。日本列島では、津軽海峡などの複数の海峡を境界線として大陸との接続の歴史に違いが生じていると考えられ、それに合わせて生物相も大きく異なることが知られている。哺乳類で唯一「飛ぶ」ことのできるコウモリはこの海峡を越えて分散可能なことから、境界線による影響は小さいと考えられている。しかしこの海峡を挟んだ歴史的影響がコウモリの分布に与える影響についての知見はほとんどない。

ネズミやシカなどの「飛ばない」哺乳類では、青森と北海道の間の津軽海峡、トカラ列島内に存在するトカラ海峡が各地域の種組成を規定していることが報告されている。コウモリに対する両境界線の影響を調べ、「飛ばない」哺乳類の結果と比較することは、昆虫類や鳥類など様々な分類群に共通する「飛ぶ」という特徴が、海峡のような分布の障害物を越えた分散を可能にし、独自の分布パターンを形成する仕組みの理解につながる。

本発表では演者が取り組んできた津軽海峡及びトカラ海峡がコウモリの分布に与える影響についての研究を紹介する。また、トカラ海峡以南であり、大陸や九州から孤立してからの

長い歴史によって、高い固有性が維持されてきた奄美大島のコウモリの保全に向けた研究も併せて紹介する。



牧 貴大氏

第 236 回 2024 年 1 月 22 日

大日本帝国期の建築物の現在から見る歴史
認識～沖縄と台湾を事例に

上水流久彦

(県立広島大学地域基盤研究機構)

世界遺産や日本遺産など、たくさんの建築物が遺産に認定されています。そして、遺産の認定は、政府の方針、国民感情、建築学や歴史学の専門家の意見のもと決定され、歴史認識や国家アイデンティティをめぐる争いの場となります。例えば、朝鮮総督府だった建物は壊されていますが、台湾総督府だった建物は現在も中華民国総統府として使用されています。今回の発表では、建築物の現在を紹介して、台湾や沖縄の歴史認識を考えてみたいと思います。

発表者は大日本帝国の建築物の現在を 5 つに分類しました。それは、外部化(破壊や放置)、内外化(負の歴史として自らの歴史の一部として遺産化)、内部化(一種肯定的に遺産化)、溶解化(日本統治の過去を忘却し利活用)、遊具化(日本的要素を強調して観光地化)の 5 つです。現在の台湾では、植民地支配の記憶を継承するという側面がかなり希薄になり、むしろ観光施設として利用されるようになっていきます。那覇では十空襲によって記憶を喚起する帝国期の建築物はなく、沖縄戦の悲惨な歴史が強調されています。忘却させられた近代とも言えます。それに対して、沖縄県の周辺部では、

建築物が残る地域では、地域の近代化を物語る道具として活用されています。



上水流久彦氏

万米ドルの乾燥魚と 1,360 万米ドルの活魚を国に供給している。定置網漁の主な問題のひとつは、対象外のアンダーサイズの魚が漁獲されることであり、これは生物多様性にとって深刻な脅威である。私たちの漁獲構成データから、乱獲と違法漁獲行為が島の水生生物多様性を脅かしていることが示された。今回の調査では、人々は医療施設を利用することができない、飲料水の危機が深刻である、といった問題に悩まされていることがわかった。この島には漁師のための病院も銀行もない。



Md. Sagir Ahmed, Md. Umar Faroque and Sujan Kumar Datta 氏

特別研究会 2023 年 11 月 27 日
 バングラデシュ Dublar Char 島の漁師の驚くべき生活と生計
 Md. Sagir Ahmed, Md. Umar Faroque and
 Sujan Kumar Datta
 (ダッカ大学動物学科)

バングラデシュは、面積 147,570 km²、人口は 1 億 6,000 万人を超え、海岸線はベンガル湾の北端に沿って 710 km に及ぶ。Dublar Char はバングラデシュの島で、面積は 66.5 km²、Bagerhat 地区の Sundarbans マングローブ林 Sharankhola 区画の沖合に位置する。この島は最も重要な沿岸島の一つであり、巨大な漁業資源と最大の乾物加工場を有する。11 月 1 日から 3 月 31 日まで、Dublar Char における漁業者の生活と生計、漁期中の漁獲構成について調査を行った。漁獲期間中、漁業、乾物加工などに従事する人口は約 25,000 人であった。生計調査は、アンケート、半構造化インタビュー、フォーカス・グループ・ディスカッション、キー・インフォーマント・インタビューを用いて行った。年齢層、教育、収入、生活環境、宿泊施設、クレジット・システムなどが調査から明らかになった。この島では、女性の滞在はタブーとされているため、人口のほぼ 100% が男性であった。定置網や behundi jal による漁獲が 90% 以上を占める。Dublar Char は、年間 1,590

特別研究会 2023 年 12 月 20 日
 インドネシア・マルク州・セラム島の高地にある遠隔地農村の食生活
 イシェ・ジェアン・リウール
 (インドネシア・パティムラ大学農学部)

インドネシア・マルク州・セラム島の内陸部の高地にあるアビオ-アヒオロ村(西部セラム県エルパプティ郡)は、開発が遅れているとともに、公共的なサービスが十分に行き届いていない。アビオ-アヒオロ村までの道は舗装されていないため、二輪車や四輪車は通行できず、村への往来は歩行のみである。アビオ-アヒオロ村から舗装道路までは歩行で 12 時間かかるが、雨期には筏を利用することで、より短時間で目的地に到着できることもある。アビオ-アヒオロ村における聞き取り調査の結果、この村は食や栄養に関する独自の社会文化のおよび生態的なシステムを持つことが明らかとなった。村人はイモ類やトウモロコシを栽培し、乾

期には天日で乾燥させる、雨期には燻製にすることで、イモ類・トウモロコシを保存食にし、必要なときに調理に用いて主食としている。アピオ-アヒオロ村は地元市場から非常に遠い場所に位置しているため、魚や市販の肉用若鶏が消費されることは稀である。村人は森で槍を使って野生動物（イノシシ、野鳥、シカ、クスクス、野鶏、ヘビ類など）を捕獲し食することでタンパク質を摂取している。肉類消費は地域の信仰とも深いかかわりがあり、例えば、来客には肉類と蒸留酒（sopi）が提供されるべきで、村が地域の自然環境に適応していれば、それが可能になると考えられている。



イシェ・ジェアン・リウール氏

特別研究会

2024年1月18日

マレーシア・サバ州トゥンク・アブドゥル・ラーマン公園とタートル・アイランド・パークにおける島の海岸線の脆弱性に関する調査
ファラ・アニス・ファズリアトゥル・アドナン

(マレーシア・サバ大学科学・自然資源学部)

気候変動に関する政府間パネルは、小島嶼が気候変動の影響に対して非常に脆弱であることを認めている。人間の活動はこれらの影響を悪化させ、環境変化に対する島の適応能力を損なう恐れがある。本研究では、マレーシア・サバ州西海岸のトゥンク・アブドゥル・ラーマン公園（TARP）と東海岸のタートルアイランド公園（TIP）内にある、地理的に異なる2つの島の海岸線の脆弱性を調査した。マスカン島（TARP）は大陸島であり、セリンガーン島（TIP）は岩礁

島である。これらの島々は、生態学的な価値があり、重要な観光地やウミガメの生息地となっているため、社会経済的にも重要な意味を持っている。この研究は、地質学的、物理的環境要因から、海岸線の脆弱性を包括的に理解するものである。研究方法として海岸脆弱性指数（CVI）を使い、海岸の傾斜、岩相、地形、海面上昇、海岸線の変化率、潮位範囲、波高の7つの重要な変数を取り入れた。この研究では、海岸線を一律に扱うのではなく、特定の区間について脆弱性の詳細な評価を行う。侵食に対する回復力と脆弱性は、岩の多い崖と固まっていない砂地とで大きく異なるため、この違いは極めて重要となる。これにより、海岸線の異なるセクション間の回復力の違いを考慮した、より対象を絞った保全戦略を策定することができる。海岸線の各セクションには、それぞれの変数に基づいてスコアが割り当てられた。これらのスコアによって、海岸線は低、中、または高脆弱性ゾーンに分類された。その結果、セリンガーン島の海岸線はマスカン島の海岸線よりも脆弱であることがわかった。この情報は、リスクの高い地域に合わせた管理方法を実施する上で極めて重要である。この研究は、環境変化に対する感受性の違いを明らかにすることで、島の海岸線を管理する上で、セクションごとの持続可能な戦略の重要性を強調している。また、気候変動の脅威が高まる中、島の保全に関する学術的な議論に貢献し、生態学的に重要で社会経済的にも重要なゾーンの責任ある管理の必要性を示している。



ファラ・アニス・ファズリアトゥル・アドナン氏

～フィールドごぼれ話～

自然の恵み

川西基博（鹿児島大学教育学部）

野外で植生の調査をしていると、思いがけず自然の恵みを受け取ることができることがあります。例えば、春の調査ではタラノキやワラビなどの山菜、夏から秋にかけては、サルナシ、ヤマブドウ、キイチゴ類、アケビなどの果実などです。

熟した果実はその場で食べられるので、運よく見つけられれば、特に嬉しい出来事になります。鹿児島でみられるキウイフルーツの仲間にサルナシとシマサルナシがあります。これらは日本在来のつる植物で、森林の縁の明るいところでしばしば見られる身近な果実です。キウイフルーツよりも小さく、サルナシは長さ2 cmほど、シマサルナシは3 cmほどですが、果実は緑色の果肉に黒い種子がちりばめられていてキウイフルーツと同じ構造です。シマサルナシの実を見つけたことは何度かありますが、残念ながら未熟でとても酸っぱくおいしくありませんでした。サルナシについては、かつて、完熟した果実を手に入れたことが一度だけありました。その果実は山中の地面に落ちていて、しかも誰かの齧り跡（猿でしょうか）がついていましたが、触った感触がやわらかで腐敗している様子もなく、完熟していると直感しましたので、きれいなところだけ切り取って食べてみたところ、予想以上に甘く感動したことは忘れられません。

アケビ科植物もおいしい果実をつくります。鹿児島ではアケビやムベなどが見られます。種子が多く食べやすいわけではありませんが、甘味はかなり強くおいしい果実です。それだけに動物も大好きなようで、動物のフンの中に大量のムベの種子が入っているのをしばしば見かけます。

山菜もうれしい自然の恵みです。以前、奥秩父の山中をフィールドとしていて頻りに調査に通っていたときは、沢沿いに野生のワサビが生えていて、時折葉を採取していました。その時はテント泊で簡易的な夕食でしたが、天然ワサビのサラダが付くと、なんとなく食事が贅沢になって満足した思い出もあります。

大学から修士までは高知で過ごしましたが、その時は春の調査の帰りにイタドリ of 若い茎を採ってよく食べました（鹿児島ではあまり食べない？）。皮をむいて生でも食べられますが、強い酸味があります。持ち帰って塩もみし、ある程度酸味を抜いてから炒め物にしますと、ほんのりさわやかな酸味になって、なかなか美味しく食べられます。高知の春を思い出させる山の幸です。イタドリは鹿児島でも普通に見られる植物ですので、ぜひお試しください。



写真1 シマサルナシ 屋久島



写真2 イタドリ

「世界島めぐり」

第十回 三宅島 日本
(Izu-Oshima island, Japan)
牧 貴大 (国際島嶼教育研究センター)

三宅島は相模湾南方海上に位置する伊豆諸島にある。東京から約 180 km 南に位置しており、面積は約 55 km²である。三宅島はほかの伊豆諸島の島々と同様に火山島であり、2000 年には活火山である雄山において大規模な噴火活動が起きた。噴火による大量の溶岩や火山灰、火山ガスの放出により島の植生は大きな影響を受けている。そのため、島内では一部立ち入り禁止区域があるものの、様々な遷移段階の植生を観察することができる。また、アカコッコやイイジマムシクイなどの絶滅危惧種を含む多様な鳥類が生息するため、バードウォッチングの場としても有名である。学術的な観点のみならず、自然観察などのレクリエーション的な観点からも非常に魅力的な島である。



三宅島地図



写真1 ハチジョウススキが
優占する溶岩跡地

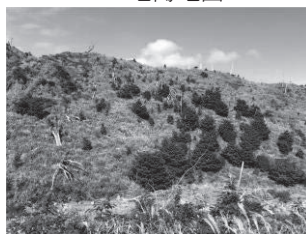


写真2 火山ガスによる影響を
受けた植生、オオバヤシャブ
シが点在する



写真3 比較的噴火による影
響を受けていない森林

最近の出版

南太平洋研究 (South Pacific Studies) Vol. 44, No.1-2, 2024

Research Paper

河合 溪・西村 知・J. ベイタヤキ：太平洋島嶼国における沿岸域村落の資源利用の変容-2005 年と 2017 年での 2 つの村を比較して-

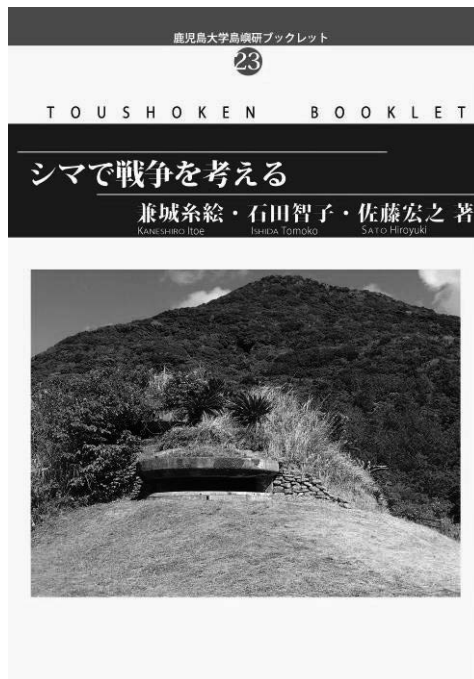
PAPOUTSAKI E. and KUWAHARA S.: Mapping Island Information Ecosystems: Exploring the Role of the 'Bōsai Musen' Emergency and Disaster Broadcasting System in the Everyday Life of Amami Islands

YARO J. and SALI G.: Effective Communication for Enhancing Occupational Health, Safety, and Risk Management in the Mining Industries in Papua New Guinea: A Case Study of Porgera Gold Mining in the Enga Province

島嶼研ブックレット

No.23 「シマで戦争を考える」兼城糸絵・石田智子・佐藤宏之 (March 2024)

No.24 「南日本の民謡を追って—久保けんおの仕事」梁川英俊・原田敬子 (March 2024)



南太平洋海域調査研究報告 No. 64 (2024年3月)

令和4年度～令和5年度鹿児島大学ミッション実現戦略分事業奄美群島を中心とした「生物と文化の多様性保全」と「地方創生」の革新的融合モデル

お知らせ

紬ビル 6 階の奄美分室横にある多目的室とセミナー室が整備されました。



新しく整備されたセミナー室（左）と解剖や簡単な DNA 実験ができる多目的室（右）

編集後記

久しぶりに海に潜り調査を行いました。1 月だったので肌寒いかと思いましたが、天気が良く気持ちのいい調査になりました。やはり野外調査は良いですね。（KK）

島嶼研だより No.87 令和 6 年 3 月 7 日

発行：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

〒890-8580 鹿児島市郡元 1-21-24

電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197

電子メール shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp

WWW <http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html>
